

研修報告 歴史分科会高大連携の試み

第7回「現代のアジアをどう教えるか」

七里ガ浜高等学校 鈴木 健司 湘南台高校 黒崎 洋介

世界史研究推進委員会のこの試みも7回目である。2014年度は8月6日（月）～8日（水）の3日間、鎌倉学園高等学校で行われた。午前は生徒への授業、午後は参観教員との研究討議という形式も例年どおり。今年度のテーマは「現代のアジアをどう教えるか」。

現代のアジアの捉え方とその教材化のあり方等をめぐって連日活発な議論が交わされ、大変有意義な研修となった。各日のテーマ・講師・参加者は次のとおり。

1日目「現代の南アジア世界」

柴泰登（中央大学附属横浜中・高） 秋田茂（大阪大学）

2日目「現代の東アジア」

中山拓憲（神奈川工業高等学校） 杉山清彦（東京大学）

3日目「現代の東南アジア」

神田基成（鎌倉学園高等学校） 桃木至朗（大阪大学）

<1日目>

20世紀の南アジア世界 柴 泰登（中央大学附属横浜中・高）

第一次世界大戦後の反英運動の弾圧に対して、ガンディーは非暴力・不服従運動を指導していく。ネルーもまたプールナ・スワラージを決議する。第二次世界大戦後、国民会議派のインドと全インド・ムスリム連盟のパキスタンに分離して独立する。その後、カシミール地方の帰属が特に問題化し、両国間で国境紛争に発展する。また、柴教諭からメモリーツリーの紹介があり、会場から好評を博した。メモリーツリーとは、学習した用語で関連するものを線で繋ぎ理解を確かめていくもので、知識を活用する手法として有効である。

現代の南アジア世界 秋田茂（大阪大学）

南アジア諸国の独立は1947年と脱植民地としては非常に早い。この背景には、抵抗運動に加え、スターリング残高の蓄積などお金の債権・債務関係の問題がある。独立後、経済の拡大を目指し、冷戦構造に対して、非同盟中立政策をとることとなる。1960年代以降、ネルーの娘インディラ・ガンディーの元で経済開発が進み、アメリカとの接近を強め、1965年から67年の天候不順による食糧危機の際にはジョンソン大統領による大規模食糧援助を受ける。これ以降、食糧自給化を目指し、現在ではインドは食糧輸出国である。また、近年はITサービス産業の勃興により、「世界のITサービスセンター」としての役割も担う。21世紀におけるインドは、タタ財閥（ミニクーパーもタタ、世界で最も安い車もタタ）が示すように、経済大国としての様相を示している。

<2日目>

現代の東アジア世界 中山 拓憲（神奈川工業高等学校）

東アジアは現在の日本にとって最重要地域であり、東アジア現代史の入試出題頻度も高い。終戦までは、朝鮮・台湾は日本の植民地であり、中国は日本と戦争を繰り返した。

中国では共産党が1949年に中華人民共和国を成立させた。しかし「大躍進」運動やプロレタリア

文化大革命は多くの犠牲者を出して発展を阻害した。毛沢東死後は鄧小平が復権し、市場経済化を進めたが、民主化運動は徹底的に弾圧した（第二次天安門事件；1989）。外交的にはソ連と対立したが、1971年には国連代表権が承認され、のち日米とも国交正常化を行った。近年はチベットや新疆ウイグルの自治区で暴動が発生したり、ベトナムやフィリピンなどと領有権紛争をおこしたりしている。

台湾は国民党が1987年まで戒厳令が敷くなど独裁が続いたが、李登輝（本省人；1945年以前から台湾に居住していた人びと）によって民主化が推進され、2000年には民主的政権交代を実現した。

朝鮮半島は、朝鮮戦争によって南北の分断が決定した。韓国の朴正熙は、開発独裁を進める一方、日韓基本条約（1965）を結び植民地統治時代の最終的解決を行った。冷戦が終結すると北朝鮮とともに国連に加盟し、「太陽政策」のもと南北首脳会談が実現した。北朝鮮では金日成の長期独裁政権が続き、長子の金正日が後継者となったが、ソ連崩壊で支援が途絶えると食料危機に陥った。2005年には六カ国協議や核拡散防止条約からの離脱を宣言し、核実験を行うなど現在も緊張は続いている。

大戦後の東アジアは、日本には「戦後」であったが、他の国にとっては「戦中」であったといえる。冷戦を背景にして国交が結ばれなかった時代が長く続き、今も多くの問題を抱えている。これからどういう未来を創造していくかは我々にかかっている。

現代の東アジア世界 — 「民族」問題の歴史的背景 — 杉山 清彦（東京大学）

○東アジアとは

現代の「東アジア世界」とは何かと考えるとき、いくつかの枠組みが考えられる。一般的な「日・中・韓・朝・台+蒙・越」のほか、「東アジア共同体」「東アジアサミット」ではASEANに米豪NZが加わる。漢字文化圏（日・中・韓・越）や、儒教文化圏・冊封体制という枠組み、風土・生業・モンスーンアジアというとらえ方もある。

○伝統的「東アジア世界」とその隣人

近世期におけるユーラシア東方の歴史的文化圏をみると、漢字文化圏と、藩部を含む中国国家という「ずれ」がある。

○“民族問題”の起源 「ユーラシアの大清帝国」から「東アジアの“中国”へ」

18～19世紀の清朝のもとには、漢字文化圏とモンゴル=チベット文化圏、トルコ=イスラーム文化圏が存在していた。清朝皇帝は、マンジュ人にとっての「ハン」、モンゴル人にとっての「大ハーン」、漢人にとっての「中華皇帝」、チベット仏教にとっての「大檀越」、ムスリムにとっての「保護者」という複合的な性格をもち、異なる諸地域・諸集団が臣属していた。

しかし近代に入ると、火器と人口圧によって中央ユーラシアが「辺境化」し、力関係の逆転がおこる。「一つの国土に一つの国民」というフィクションのもと漢人官僚の支配が強化され、複合的支配の「帝国」から、他民族・多言語・多宗教に不寛容な「国民国家」へと変貌していくようになる。

○現代の民族問題と「東アジア」の一断面

辛亥革命で成立した中華民国は、皇帝支配体制に代わるものとして、漢人支配のもとに、それまでの版図を継承する「中国」という概念を創出した。しかしモンゴル・チベット・新疆は、清皇帝の退位によって連合は解体したと理解し、自立する動きを見せたため、その後の中国共産党との衝突ののち、モンゴル人民共和国となった外モンゴルをのぞいて自治区という枠組みに組み入れられた。チベット・新疆における1980年代以降の民族衝突・権利要求行動の激化の背景には、事実上の漢人支配に対する歴史的経緯からの反発や、漢人社会の人口圧・同化圧力への危機感があると考えられる。「東アジア」の範囲と共通性を考えたとき、「中国=東アジア」ととらえると、現状彼らもその中に組み込まれてしまうということ念頭に置く必要があるだろう。

< 3 日目 >

現代の東南アジアをどう学ぶか～国民国家の形成と限界～ 神田 基成（鎌倉学園高等学校）

第一次世界大戦後、「民族自決」の潮流を受け東南アジアでも民族運動が活発化していく。当時の風刺画を見ると、植民地下の欧米人と現地人の関係がユーモラスに描かれているものもあり、興味深い。そのようななか太平洋戦争で日本が進出して、一時的に欧米勢力が駆逐されたことを契機に、戦後は各国が次々と独立していった。ベトナムでは、フランス撤退後も米・ソ・中が介入したことで、東西冷戦期における「熱戦」となり、世界の市民運動・反戦運動にも大きな影響を及ぼした。独立後、多くの国では開発独裁と呼ばれる体制のもとに近代化が推し進められ、現在は著しい経済成長を見せるようになった。このように東南アジアの国民国家創出は実現したように見えるが、政情不安定や民族問題、宗教問題など多くの課題も表面化してきている。

人物で見る現代の東南アジア世界 桃木 至朗（大阪大学）

○東南アジア現代史の基本構図とリーダーたち

東南アジアでは、インドや中国、日本との密接な「アジア間貿易」に加え、プランテーションや鉱山の開発を通じて、華人・インド人など外部労働者が流入したこともあって、広範な他民族社会が形成されていた。そのため、「どこの」「だれが」独立運動の主体になるべきかについて、「明白な正解」はなく、試行錯誤が避けられなかった。太平洋戦争が始まると日本軍に協力したリーダーたちも多かったが、やがて失望が広がり、連合国側に協力するなどの動きが各地であらわれる。しかし彼らは独立を第一義と考えたこともあり、日本や日本に協力した人びとへの追求はあまり厳しくなかった。

戦後は各国が独立を果たしていくが、東西対立の影響によるベトナム戦争など、どこも国造りは難航した。1970年代から「開発独裁」政権下での外資導入・輸出主導型工業を中心とした経済開発政策が進展した。近年は、ASEANが地域協力の組織に変化し、ARF（ASEAN地域フォーラム）やASEAN外相会議などを通じた多面的外交の努力が行われるようになったが、中国の経済成長と勢力拡大にともなって南シナ海での領土・領海紛争などの対立も顕著になってきている。

○ホー=チ=ミンの東南アジア史

1890年、ベトナム中部の知識人家庭に生まれる。フランスに渡り、1917年ころから独立運動家として「グエン=アイクオック（阮愛国）」を名乗った。ソ連でコミンテルンの活動家になり、1930年には香港でベトナム共産党を発足させる。1940年にフランス本国がドイツに降伏して日本軍がベトナムに進駐すると、帰国してベトミン（ベトナム独立同盟）を結成し、抗日ゲリラ戦を開始した。このころからホー=チ=ミン（胡志明）を名乗るようになる。日本が降伏すると一斉蜂起して全土を解放し、「ベトナム民主共和国独立宣言」を発表。植民地支配を復活させようとするフランスとの独立戦争が始まった。フランス撤退後もアメリカの介入を受け、国土は南北に分断されるが、ソ連・中国の支援を受けて粘り強く戦い、ホー=チ=ミン死後、独立を勝ち取った。しかし急速な社会主義政策は南部からの大量の難民を生み出すなどして失敗し、カンボジア出兵で国際的にも孤立。1986年から開始したドイモイ（刷新）以後、市場経済化に踏み切り、経済発展が促進されている。

ホー=チ=ミンは独自の理論をつくらなかったが、組織を作り弟子を育てることに長け、普段は仕事を任せて、問題が起こったときの調停者・押さえ役に徹した。清貧な生き方に加え、数々の名言・ユーモアある文章、ゲリラ戦の必要から少数民族との協力、敵をあまり殺さないところなどから、当時も今も悪く言われることがほとんどない。助け合いや教育を大事にするムラ社会と権力が多元化する政治構造などベトナム的伝統と、グローバルな活躍を両立させた珍しい人物であると言えるだろう。